

第二次審査（論文公開審査）結果の要旨

Constipation in Patients with Acute Ischemic Stroke
: A Single-center Retrospective Analysis

急性期脳梗塞患者における便秘: 単施設後方視的研究

日本医科大学大学院医学研究科 神経内科学分野
大学院生 沓名 章仁

Journal of Nippon Medical School. 2025 Apr 25;92(2) 掲載予定

便秘は急性期脳梗塞患者で多く認められる症状であり、腸管運動における自律神経障害の症候の1つでもある。また、大脳の島皮質は自律神経との関連が報告されている。右島皮質への刺激は交感神経活性を亢進させ、腸管運動の停滞により便秘をきたし、また、対側の左島皮質の損傷は、右島皮質が相対的に過活動となり、交感神経活性が亢進し、便秘をきたすことが考えられる。左右の島皮質の損傷のどちらが便秘をきたしやすいかは、明らかではない。そこで申請者は、急性期脳梗塞患者において、梗塞巣に島皮質を含むか否か、さらには梗塞巣を左右に分けて、便秘の頻度と病巣の関連を検討した。

2015年1月から2018年12月に日本医科大学付属病院脳卒中集中治療科に急性期脳梗塞の診断で入院した連続症例のうち、発症7日以内の頭部MRIで中大脳動脈領域に急性期脳梗塞を認めた症例を対象とし、後方視的に検討した。連続1602例のうち、MRI未施行44例、中大脳動脈領域に梗塞巣を認めない583例、両側大脳半球脳梗塞27例、入院後1週間以内の死亡14例、または退院38例、データ欠損4例を除外した892例を便秘群と非便秘群に分け、臨床的特徴を比較した。便秘の定義は「入院中に①排便が週に3回以下、かつ、②下剤が処方された、の2項目を満たしたもの」とした。

便秘は291例(32.6%)で認められた。便秘群と非便秘群の単変量解析では、高齢、心房細動の既往、入院時高NIHSS、入院時高血糖、心不全、誤嚥性肺炎、入院前下剤内服歴、抗菌薬使用、整腸剤使用、左側脳梗塞、島皮質を含む脳梗塞が便秘群で有意に多かった。多変量解析では、島皮質を含む脳梗塞(オッズ比2.30、95%信頼区間1.57-3.36)、左側脳梗塞(オッズ比1.93、95%信頼区間1.40-2.64)、入院時NIHSS(オッズ比1.04、95%信頼区間1.01-1.06)が便秘の独立した関連因子であった。病巣の検討では、左島皮質を含む脳梗塞群で便秘が最も多かった(69.6%)。さらに重症度の比較を加えた検討では、NIHSS10点以上の重症群で左島皮質を含む脳梗塞群で便秘が最も多く(77.8%)、また、NIHSS9点以下の軽症群でも同群で便秘が最も多かった(40.0%)。従って、入院時の重症・軽症のいずれにおいても左島皮質を含む脳梗塞群で便秘が最も多かった。

脳梗塞急性期の便秘は、多変量解析で島皮質を含む脳梗塞、左側脳梗塞、入院時高NIHSSが独立した関連因子であり、さらに左島皮質を含む脳梗塞患者で便秘の頻度が高いことが示された。

第二次審査では、本論文の新規性、発症前の排便状況や背景疾患、便秘に影響を与える因子の多様性、便秘の発症時期と経過、便秘以外の自律神経障害の症候、便秘がADLに与える影響、脳卒中診療における便秘治療後の長期予後などの幅広い質疑が行われた。いずれも的確な回答が得られ、本研究に関する知識を十分に有することが示された。本研究は脳卒中レジストリを用いた観察研究であり、左島皮質を含む脳梗塞患者で便秘の頻度が高いことを指摘し、申請者が自立した研究者としての資質を備えていることを示している。

以上より、本論文は学位論文として価値あるものと認定した。